



大阪での出来事 2

精神的に病んでいく一人の
青年を誰も助けてあげられ
ない

さくらじまゆうすい

第一章～その1～

俺はテレパシーが使える。そういえば数年前から変なことがあった。ちょうど藤中ナオさんたちと炊飯のスタッフをしているときだった。数百メートル離れているはずの人から、「あなたのやってることを見てたわよ」などと当てられたことがあった。そのときはその人がそういう能力を持っているだけだと思っていたが、俺自身にテレパシーなど飛ばす能力がそのころから備わったいたと、今になって冷静に考えればわかったような気がする。

その宗教では教師とかある程度修行を積んだ人になると、相手の心を読めると聴いていた。だからそういう人たちの隣に座ったりすると俺の心が読まれているのではないかと恐れていた。その恐れが俺にテレパシーなどという必要もない能力を身に着けるきっかけを与えたのかもしれない。

こういう超能力など信じるも信じないも自由だが、数百メートルも離れたところから俺がやっていたことをずばり当てられたりすると、超能力の存在も認めざるを得なかった。

そういうこともあったせいだろうか、俺は二年間ほどその宗教団体から遠ざかった。一番の理由は神様が怖くなった。名づければ対神恐怖症とでもいうのだろう。その上俺の腹の中にたまっていた声まで聞こえるようになってきた。以前から宗教の先生から俺は磨き石になっているなどと言われたことがあった。俺はその意味がわからなかったが、腹の中の声が聞こえてきたことによってその意味が分かった。とにかく宗教の教師の非難をしていた。しかも強い口調で辛辣な言葉を並べていた。先生から嫌われても仕方がない。

俺はそういうことのあって信仰から一旦去ることにした。たまに、支部に顔を出すことはあったが、二年間は遠ざかった。その間に以前の職場での人間関係は悪くなる一方だった。俺は信心が足らなかったせいだと思えなかった。

今現在は基本的にテレパシーというのは誰にでも、何にでも備わっているものだと思っている。気づかない人はただ単に心を閉ざしているか、心の声を無視しているだけのことだと思う。その宗教ではそのことを霊線につながっていると表現していた。俺個人ともいろんなものと霊線につながっている。一番の霊線の強いものは地球だろう。地球とは一番強い引力でつながっている。次に引力の強いものは月だろうか。そのほかのものも万有引力でつながっている。

というわけで身の回りの人々や物事とは引力でつながっている。好むと好まざるとに関係なく引力でつながっている。それが目に見えない世界の実態だ。

第一章～その2～

当初はテレパシーを使えると知って有頂天になっていた俺だったが、一つ不安がよぎった。それは、何か汚い言葉や恥ずかしい言葉が頭の中に浮かんで来たらどうしようということだった。そんなことになったら、本当に穴があったら入りたくなくなってしまう。

そんな不安をかかえたまま、俺は滋賀県にある宗教の本部へ行くため大阪支部へ泊り込んだ。早朝本部へ向かうバスが出るため念のため支部に泊り込んだ。

翌朝、その悪い予感は的中した。恥ずかしい言葉が連続して頭の中で繰り返した。「処女」という言葉を連続して思い浮かべる。俺は何が何だかわけがわからなかった。とにかく繰り返す恥ずかしい言葉をコントロールできない。「処女」という言葉を思い浮かべるたびに周りの人々が笑っている気がした。

俺はテレパシーを使えるようになったことを自慢げになったために天罰が下ったのだろうか。そうとしか思いようがなかった。本部へ向かうバスの中でその恥ずかしさに耐えていた。本部についてバスを降りても事態は変わらなかった。相変わらず「処女」という言葉が頭の中で繰り返す。

本部でも自分の思考をコントロール不能になり、ただ「処女」などという言葉を繰り返した。俺は何が何だかわからなかった。その宗教の教祖が言うとおりにキツネやタヌキの霊がついてしまったとか、そんなことしか考えられなかった。とにかく、周囲にいる人々には全員に俺の考えていることが伝わっているような感じがした。

本部での用事が終わり、大阪支部へ向かうバスの中でもやはり事態は変わらずにいた。俺は途中から恥ずかしい言葉を抑えようとする試みをやめ、いろんな声や音を頭の中で繰り返した。そうするとバスに乗っていた人々の反応も変わった。いろんな声や音を思い浮かべる方が楽でいい。それでも時折「処女」などと聞こえる。

やがて、バスは大阪支部に着いた。俺はバスを降りると支部には入らず、さっさと自分の部屋へ帰った。その方が楽だったからだ。

翌日になると事態はますます深刻になっていた。「セックス」だとかますます恥ずかしい言葉が頭の中で繰り返す。その後も次第に頭の中で繰り返す恥ずかしい言葉や「死刑」などという乱暴な言葉は増えていく一方だった。それをごまかすため俺はさまざまな音楽やCM、言葉などを繰り返した。それでも変な言葉が繰り返すことには変わりはない。

そして、周囲の人々の反応も変わっていった。最初は面白がって笑っていた人たちも、次第にいくら面白いことを考えても笑わなくなってきた。もういい加減うんざりしてきたのだろう。明らかに迷惑がっている。俺はどうすれば恥ずかしい、乱暴な言葉を思い浮かべなくなるのか全く分からない状態だった。

第一章～その3～

四六時中幻聴が聞こえる。睡眠時間は一二時間しか取れない。テレビやラジオ、そして世界中の人たちが俺の噂話をしているような気がする。次第に心を病んでいた。俺はとうとう仕事を辞めた。そして信仰も辞めて大阪から故郷の鹿児島へ帰ることにした。

俺自身が精神的におかしいせいもあったが、もう周りの人たちに迷惑をかけたくなかった。職場の人たちも引き止めてはくれたが、俺が精神的に病んでいることは知らないでいる。俺は仕事を続けるよう勧めてくれるありがたい申し出を断った。

大阪駅から鹿児島往きの夜行列車で田舎に向かった。季節はもう1994年の夏になっていた。

これだけ精神的におかしくなりながら、精神科などの病院にかかることはなかった。その理由は自分が続けていた信仰が医学や薬を否定するような教えを説いていたし、その宗教団体の人たちも病院にかかるようなことは勧めてくれなかった。自分自身でも病気の自覚がなかったし、職場の人たちもまさか俺が心の病などに罹っているとは思いつけなかっただろう。

列車は鹿児島へ到着した。駅までは両親に迎えに来てもらった。それから車で家まで帰った。それから話し合いになった。

「俺、大阪から鹿児島へ帰ることにしたから」

「いつごろ帰って来れそうだ」

「そうだな、まだ大阪でいろいろやることがあるから、まだわからないな」

「こっちへ帰ってきたら、車の免許を取らなきゃいけないな」

「免許ね。それはかんがえてなかったな」

「こっちへ帰ってきてから免許を取るか？」

「いや、それは俺に決めさせてくれ」

ただ、俺はできるだけ早目に鹿児島へ帰るつもりでいた。それで、幻聴とか気が収まるのではないかと思っていたからだ。

その田舎に帰っている間も俺は奇矯な言動があった。親戚と両親が隣の部屋でしゃべっていると、まるで俺のことを馬鹿にしているかのように聞こえたので、ふすまを破いて、大声で怒鳴ったりした。

さらに夜中になってもう交通手段もないのに、大阪へ帰ると言って家を飛び出し、家族が車で追いかけて来るまでバッグを担いで歩き回ったりした。

その時も家族は俺の精神的な異常さに気が付いていなかったのだろうか。気が付いていたら精神科などへ行くよう勧めていたかもしれない。それとも俺がすぐにでも大阪から鹿児島へ戻ってくるとでも思っていたのだろうか。

第一章～その4～

俺は一旦大阪へ帰った。鹿児島へ引っ越すにもいろいろと手続きが必要だ。そして、信仰もまた辞める覚悟でいた。一番の理由は精神的におかしくなっていたためだった。しかし、ことはそう思い通りにいかなかった。大阪支部の俺の担当の柵が俺のアパートの部屋の前で待ち伏せしていた。

そのまま柵の運転する自動二輪車の後ろに乗せられ、俺はまた大阪支部へと連れて行かれた。俺はもう田舎へ帰って何もかも終わりにするはずだったのに、逃れられなくなっていた。

その宗教では素直に実行というわけで、上からの命令は聞かなければならないようになっていた。俺のような下っ端の信者は上の言うことを聴くしかなかった。

それでも、俺は何度か脱出を試みた。それでも柵は俺のアパートの前で待ち伏せをしていたりする。これではまともに断ることさえできない。まだ、俺がこの宗教の教祖かなんかだと信じ込んでいるらしい。俺にとってはもうそんなことはどうでもいいことだった。

それに、俺はただの下っ端の信者の一人には間違いない。その俺がこの宗教に残って、いったい何をやれというのだろう。精神的に病んでいたせいもあり、もう信仰などどうでもよくなっていた。

実際、大阪支部内でも問題行動を起こしたりした。何かわけがわからないことを言う奴の胸ぐらをつかんで、怒鳴りつけたり、本部へ行くのが嫌で、真夜中、支部をこっそりと抜け出したりした。

そこで思いついたのが、俺が果たして本当にこの宗教の教祖の生まれ変わりか何か確認しなければならないということだった。それには前世などを鑑定できる霊能者などを頼る必要がある。俺はタウンページを開いてそんな霊能者がいないかどうかを確認した。すると一人見つかった。

第二章～その1～

タウンページに確かに前世鑑定と書かれてある。場所は京都の方だ。電車でも行くことができる。俺はとりあえず電話で問い合わせしてみることにした。

結構有名な占いの先生らしい。しばらくは予約でスケジュールが埋まっているので、約一か月後に予約を取った。鑑定料は三万五千元。少々高いと思ったが、俺が通っている宗教でもそれくらい平気でとられる。まあそれくらいが相場だと思った。それに俺が疑問に思っていた俺自身の前世をはっきりさせることができる。それくらいのお金ではっきりするならお金は惜しくはない。

前世鑑定を受ける前日思わぬ邪魔が入った。あの終だった。俺の部屋のカレンダーに鑑定を受ける日にマークしていたので不審に思ったらしい。

「明日、バイトに行く予定だったんだけど、それがいけなくなってね。俺の代わりに藤坂が行ってくれないか。日払いだからその日に六千円受け取れるし。なあ、いいだろう？」

「いや、断る」

「そんなこと言うなよ。誰か代わりに行ってくれないと困るんだ。だから頼むよ。明日俺の代わりにバイトに行ってくれ」

「いや、断る。明日予定があるんだ」

「そうか、でも六千円もらえるんだぞ」

「いや、いい。他の人に頼んでくれ」

俺は座っていた椅子から立ち上がった。そして大阪支部のご立派な建物から立ち去った。

翌日、予定通り占い師の鑑定を受けに行った。季節はもう秋になっていた。その年の夏は暑くて、まだ残暑が残っているくらいだった。

予定より少し早めに着いた。先客がいるらしく、話が聞こえてくる。どうやら今付き合っている男と別れるべきかどうか相談に来たらしい。しかし、相談している相手は某有名占い師ではなく、弟子の若い占い師らしい。その時、その某有名占い師が現れた。

「下の方、ひっくり返ってたけど、大丈夫？」

いきなり、わけのわからないことを弟子たちに言ってきた。弟子たちも何も答えなかった。

「あなた、私が特別に看てあげるから」

と、弟子たちが看ていた先客の女性の向かい側に座った。

「あなた、別れなさい。以上です」

やや太めの女性占い師の大きな声が聞こえてきた。先客が何か尋ねたが、声が小さくて何を言っているか聞こえなかった。

「そう、そういうこと。別れなさい。いいですね」

先客の若い女性は静かに帰って行った。結構きれいな顔をしていた。

「次の方どうぞ」

次は俺の番だった。

「あなた、何か黒い影が見えるわ」

「ああ、何か見えますか？」

「どうやら、本当に何か見えるらしい。」

「その黒い影が今のあなたの困った状態の原因になっているみたいなの」

「そうですか」

「どうやら、その影のようなものが幻聴や妄想の原因になっているらしい。」

「鑑定が終わった後、私が特別にお祓いをやってあげるから、安心しなさい」

「いくらか、お金いるんですか？」

「いえ、特別に鑑定料だけでやってあげます。それとちょっと待っててね」

「と言うと、占い師は静かに目を閉じて両手を合わせて何かを看ている様子だった。」

「あなたの前世は、幕末に活躍した勤王の志士らしいですね」

「え、私ですか」

「ええ」

「これは、意外な答えが返ってきた。俺はすっかり教祖様かなんかの生まれ変わりと思っていたし、周囲の人たちも暗にそういう扱いだった。」

「それと、あなた海外に引っ越しなさい」

「海外ですか？」

「ええ、沖縄とかじゃだめですよ。南の方角がいいですね」

「それと、占い師はお守り代わりに数珠を持っているといいと言った。近くに仏具屋さんがあるからそこで買うといいと最後に言った。」

「俺は、言われた通り数珠を買って、電車でアパートへと帰って行った。」

第二章～その2～

俺は前世鑑定を受けたものの、しばらく本当のことかどうか疑っていた。とにかく、教祖か幕末の人間だったかどうかだとは思っていた。そんな有名人でもなければ、いまだに数か月間経ってもテレビや街中の人たちが俺の噂話をしているわけがない。俺の迷いはまだ続くことになった。

そんなある夜、部屋で眠ろうとすると見覚えのある顔の幽霊みたいなものが見えた。その霊はすうっと俺に近づいてきて次のように言った。

「藤坂さん、前からお慕いしておりました」

その一言を残し、霊は消えていった。藤中ナオさんだった。生霊か？それとも俺が単に寝ぼけていただけだったのか。幻聴だけでなく、幻視も時々起っていたのでそれほど驚きもしなかった。

それからナオさんのことが気になり始めた。それとちょうどそのころ自動車学校へ通い始めた。故郷の父は鹿児島へ帰ってきてきて免許を取ったらどうかと電話で提案してきたが、俺はその話を断り関西の方で免許を取ることにした。まだ大阪でやらなければならないことがあるような気がしていたからだ。

自動車学校は兵庫県にある片田舎の学校を選んだ。学費が大阪の学校に比べれば少々安く済んだからだ。合宿でなく、通いになった。

学校でも苦勞して勉強しなければならなかった。幻聴と妄想のせいだった。まるで学校の先生たちが俺のことをいじめているくらいに感じていた。それと、俺の前世やナオさんのことも気がかりになっていた。それで、またいい加減なテレパシーを使い始めた。ナオさんと通信をしている気分になっていた。

テレパシーを使っているうちに、ナオさんが何か謎を解くカギを握っている気がしてきた。そのカギが何かまでは何かはわからなかった。しかし、本当に本人と通信しているかどうかもわからないのに、気持ちだけは楽だった。テレパシーを使っている間は恥ずかしい言葉や乱暴な言葉が出てこなくて済んだからだ。

ナオさんがカギを握っている。俺ははっとした。もしかしてナオさんがこの宗教の教祖様ではないか。俺は霊能者でもなんでもないし、何の証拠もなしにナオさんのことをそんな風に決めつけるようになった。ますますテレパシーから離れられなくなった。

今になってはあの時の俺は愚か者以外の何者でもなかった。誰にも俺の抱えていた問題を相談することもなかったし、自分一人で解決しようとしていた。それに一度大阪支部の人に、俺の考えていることがみんなに聞こえているような気がするというと、そんなことはありえないとあっさり否定された。それで誰に相談してもだめだと勝手に思ったのかもしれない。

それは現在でも変わらない。俺は誰かに俺の考えていることが聞かれている気がしても、誰も聞こえないというし、それはただの俺の幻聴や妄想のせいにされる。今現在でも未解決な問題だ。今の俺もどう考えたらいいのかわからない。状況はあの頃よりはましだが、今では引きこもりと変わらないような生活を続けている。

第二章～その3～

季節は冬になっていた。もうクリスマスも近い。みんなお祭り騒ぎに浮かれている。大阪支部の大学生部の間でもちょっとしたパーティーを開くらしい。俺はそれどころでなかった。ナオさんが教祖の生まれ変わりならその証拠をつかむ必要があった。それくらいの人なら本人に確認した方がいいのではないかと思うようになった。何しろ最近テレパシーを使ってしか話をしていない。ナオさん自身も次第に大阪支部に顔を出さなくなっていた。俺は参拝者名簿のところに置手紙などをしたが、全く連絡する様子もない。

そして、テレパシーもとうとう度が過ぎて、耳だけでなく体でも感じるようになっていた。体感幻覚というらしい。ナオさんが俺に乗り移ったような感覚があった。それも本物のナオさんかどうかも全く証拠もなしに決めつけていた。今思えばただの幻覚だし、宗教家の言うようにキツネの類が取りついてたのかもしれない。すべては俺の思い込みが原因だった。

体感幻覚のため、ナオさんは周囲の人たちからひどい目に遭っているのではないかと思い込むようになっていた。それをどうしても確認しなんとかして助け出さなければならない。

俺は大学生部の名簿の中からナオさんの住所や電話番号等を調べ上げた。そして、電話をかけてみると電話でも話したくないし、会いたくもないという。俺はあきらめかけたが、体感幻覚は収まらなかったし、彼女が教祖かどうかも確認しなければならない。

今思うと浅はかな考えだった。幻覚が彼女が原因で起こっている証拠は何もないし、教祖の生まれ変わりか何かという証拠もない。またそれを確認する必要も全くなかった。もし前世が教祖か何かだとしても、それでどうすればいいというのだろう。明らかに俺の思い込みだったし、精神的にかなりおかしくなっていたということだった。

なんとか体感幻覚を止めなければならないということだけ考えていた俺は、直接ナオさんの家を訪問した。最初、ナオさんのお母さんが出てきた。

「ナオならいませんよ」

「いやそんなはずはない」

「本当にいませんたら」

「いやいるはずだ。出せ」

俺は我慢しきれずにナオさんの家に上り込んだ。そして布団にくるまっていたナオさんらしい人を見つけて布団を引きはがした。しかし、それはナオさんではなく、弟さんらしかった。

「ほら、いないでしょう。帰ってください」

俺は仕方なく藤中家を後にした。それでも体感幻覚は収まらなかった。体中の体毛が逆立つような感じがしたり、皮膚がぶるぶる震えるような何とも口では言い表せないような感覚があった。

今では皮膚の幻覚が誰のせいでもなく病気のせいだとわかっている。もっと早く故郷の両親のもとへ帰るべきだったし、病院にも早く通うべきだった。病院や薬が悪だと決めつける宗教などに洗脳されていた世間知らずな俺はその時取り返しもつかないことをしてしまったと反省している。とにかく幻覚は誰のせいでもなく病気のせいだった。そんな常識的なことに早く気づくべ

きだったし、医学の専門的な知識もない人たちの言うことを真に受けるべきでない、今の俺ははっきりと言い切れる。

第二章～その4～

体毛が逆立つ感じや皮膚が震える感覚が収まらないのを勝手に藤中ナオさんのせいだと決め付けた俺は、その日のうちに再び藤中家を訪問した。今度はタイミングよくナオさん本人が自転車で家に帰ってきた。

「あんた、勝手に家に上り込んだそうだな」

「ええ、まあ」

「それに支部の人に許可を取ってきたのか？」

「いや、いいえ」

「あんた、大阪支部がどうなってると思われてもいいのか」

俺はそう聞かれて何も答えられなかった。俺は『あなたはこの宗教の教祖様なのか』と聞こうとも思ったが、とてもそんな雰囲気ではなかった。皮膚の幻覚にしろ、前世のことにしろすべては俺の幻覚と妄想という統合失調症の症状のせいだった。

そのころ、鹿児島から両親が俺を連れ戻しに大阪へやってきた。あとで聴いてみると大阪支部の方から、もう俺は手におえない状態になっているので、両親に連れ戻して欲しいと連絡があったらしい。俺はその当時、そんなことがあったことさえ知らなかった。

鹿児島へ帰ることは相談していたが、まだ問題は解決していない。教祖の問題と皮膚の幻覚の問題が残っていた。俺はやはりナオさんが何か異常な環境にあるのではないかと信じ込んでいた。俺は決死の覚悟でもう一度ナオさんの家に押しかけることにした。両親にも藤中家へ行くことを告げ、何かあったら大阪支部へ伝えてくれと言い残して出かけた。

そして三度目になるが、ナオさんの家にたどり着いた。すると五人ぐらい男の人ばかりぞろぞろと俺を囲むように出てきた。多分俺が最近様子がおかしいので、親戚中で集まってナオさんを守ろうとしていたのだと思う。しかし、その当時の俺は逆にこの人たちがナオさんに何かひどい仕打ちをしているのではないかと疑った。

「ナオさんはどこだ」

「いないよ」

「嘘つけ、どこに隠してるんだ」

「だからいないって」

「いや、必ずいるはずだ」

「いないけどな。おいヨウコ、この人に見覚えあるか？」

その親戚らしい人が呼びかけたのはナオさんではなくどうやらナオさんの親せきらしかった。

「ナオさんじゃないだろう。ナオさんはこの上か」

俺は土足のまま家にあがろうとした。しかし相手は五人がかりで俺を抑え込んだ。俺はあきらめるしかなかった。

「藤坂さんとかおっしやいましたね」

「ええそうです」

「私がナオの父です」

「あなたが、ナオさんはどこにいるんですか？」

「今は事情があってあなたにはお会いすることはできません。すいませんが、お引き取り願えませんか」

「そうですか。でもナオさんは無事なんですよ」

「ええ、心配することはありません」

「わかりました。私はその言葉を信じて帰ることにします」

俺はその場を立ち去ったが、電車の中でまた体感幻覚が現れ始めた。俺は皮膚の幻覚に耐えるしかなかった。そして、まだ藤中家の人々のせいにして、イライラしていた。

俺は柵からきつく、もう藤中家に行かないように言われた。メモしていたアドレスも名前も目の前で消さなければならなかった。それでも体毛が逆立つ感覚や皮膚が振動する感覚は消えなかった。ただただ、幻聴や幻覚、妄想に耐えなければならなかった。その問題は現在引きこもるという形で解決しようとしている。

しばらく両親と狭いアパートの部屋で過ごしながら鹿児島へ帰ろうなどという話をしていた。そんなとき大阪支部の杉谷が俺の部屋にやってきた。

「今日はお願いがあってやってきたんですけど」

「なんですか？」

「トオル君のことなんですけど、もう私たちの手に負えないんで、ご両親が鹿児島の方へ連れて帰って欲しいんですけど、いかがでしょうか？」

俺はその話を聞いて、ほっとしたような感じがした。

「ええ、いいですよ。いつまでに帰ればいいんですか？」

杉谷はその質問には答えず、何か悲しそうな表情にさえ見えた。しかし、この話は杉谷個人で判断して提案したことではないだろう。おそらく教師などと相談してそういう結論に達したに違いない。ようするにもう大阪支部、いやこの宗教団体ではもう俺は必要ないということだ。俺は潔く大阪から帰ることにした。

多分この問題は杉谷や柵たちに任せておけば解決してくれるだろう。それにナオさんのお母さんは神戸支部の方で割と偉い方らしい。今回のことでナオさんのことは問題が解決の方向へ向かうことを期待した。

大阪にやってきてもう七年以上たった。俺はもう鹿児島へは戻らないつもりで大阪へやってきた。鹿児島にはいい思い出がさっぱりなかったからだ。よその土地でもう一度人生をやり直そうとした。

大阪へ出てきて初めのうちは言葉も鹿児島弁のままだったし、慣れるまで時間がかかった。しかしそれでも大阪の人たちは俺みたいな無愛想な人間にも気軽に話しかけてくれる。友達を作るのにそんなに困らなかった。そんな思い出の詰まった大阪から鹿児島へ戻っていくのはさみしいことだった。鹿児島には友達らしい友達もいない。またさみしい暮らしが待っているに違いない。

大阪空港から鹿児島空港までそれほど時間はかからない。しかし、鹿児島へ帰ってもやはり幻覚や妄想には耐えなければならなかった。1995年の正月を迎えていた。まだ、体感幻覚をナオさんたちのせいだと疑っていた。しかし、これも統合失調症という病気のせいだと後で思い知らされた。

大阪での出来事 2

<http://p.booklog.jp/book/57130>

著者：さくらじまゆうすい

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/dpmpct5160/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/57130>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/57130>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ